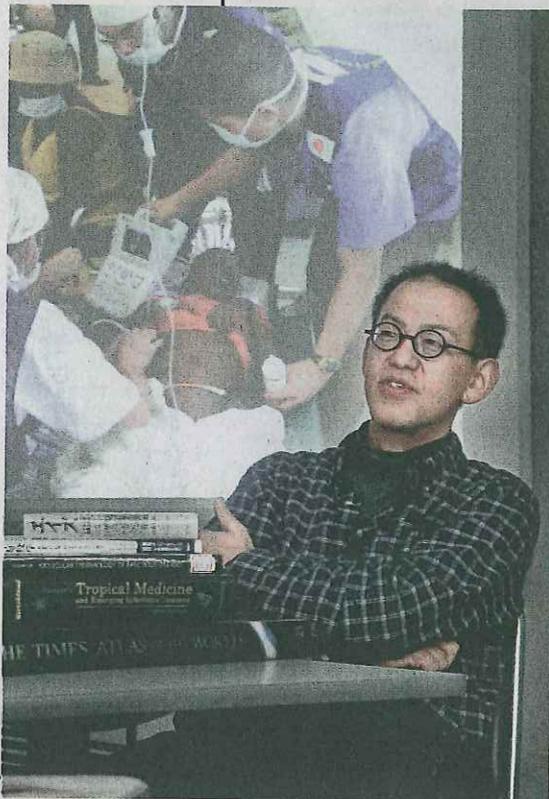


情熱と冷静さを持ち、やるべきことやるだけ



ハイチ支援に当たった
長崎大熱帯医学研究所教授

山本 太郎さん 46 (長崎市)

広島県竹原市出身。長崎大医学部などを経て、東京大大学院で国際保健学博士号を取得。国際緊急援助隊の一員として、1月のハイチ大地震の被災地で医療支援を行った。趣味は数年前に始めた剣道。

究を始めたのは2003年7月。重症の少女が周囲に見放され、捨てられる現実を知った。現場を駆け回ったが、反政府武装勢力が蜂起し、8か月で出国せざるを得なかった。

今回の滞在中、テントの隣で赤ちゃんが生まれた。「おぎゃー」と元気に響き渡る産声。だが、心を和ませる余裕はなかった。「予防接種が遅れると、弱い命はどんどん犠牲になる」。気温が45度になるテントで、目の前の患者と向き合い続けた。任務は8日間で終わった。「良くも悪くも、ハイチの注目度は上がった」と感じる。日本に戻り、これからどうかわかるか、と思案する。「情熱と冷静さを持ち、やるべきことをやるだけ」。今まで同様、それしか答えは思い浮かばない。

文・寺垣はるか
写真・貞末ヒトミ

研究室のテレビは、かつて暮らした街の大災害を繰り返し伝えていた。1月13日。ハイチ大地震。すぐに外務省に電話し、協力を申し出た。「最貧国の実情を知る医師の役割だ」。そう思った。

発生から5日後に首都ポルトープランス近郊の街に着いた。診療テントは、シートで作られた粗末な小屋が集まる地区にあ

った。皮膚から骨が飛び出したり、手足が壊疽したりした住民が次々と運び込まれた。

大学院でウイルス学を専攻した。エイズが国際問題となり、「21世紀はアフリカ大陸に人類

が住めなくなる」と言われたころ。「実験室よりフィールドで働きたい」と、アフリカ南部のジンバブエに飛び、保健省の政策立案に携わった。

ハイチに赴任し、エイズの研